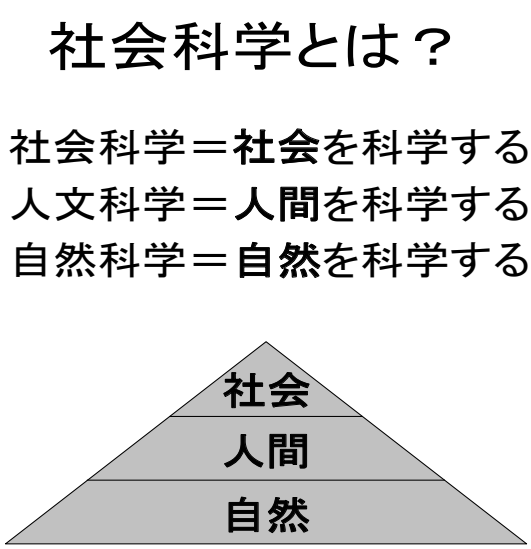
１５　研究者のアクセス手法　II
社会科学系図書館と研究者のニーズ

一橋大学附属図書館長
渡辺　雅男

はじめに

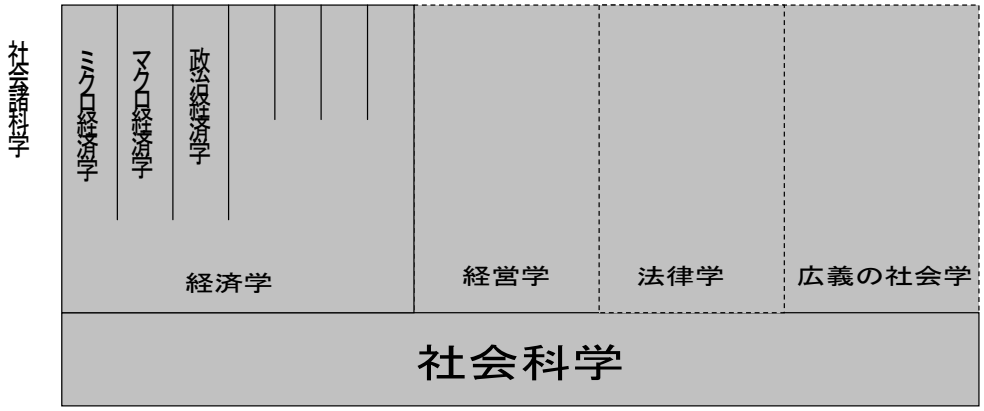
社会科学系といっても研究者のタイプはさまざまですし、その教育がカバーする範囲もさまざまです。そこで、まず社会科学とはなにか、という問題からお話し、それに基づいて、図書館員から見たいくつかのタイプに分類し、それぞれが抱く期待と、抱える問題について触れていきたいと思います。

Ⅰ　社会科学とはなにか



市民社会の活動領域

- ビジネス活動　　→経営学
- 経済活動　　→経済学
- 法にまつわる活動→法学
- それ以外のすべての市民的社会活動
　　→広義の社会学



II　図書館員から見た社会科学者

・　本重視 vs 雑誌重視

主に本を利用するか、それとも雑誌を利用するか。

業績でも、本が重視されるか、それとも雑誌が重視されるか。

例　歴史学 vs 経済学

・　学会雑誌（国際学術雑誌）vs 大学紀要

流れは学会雑誌（国際学術雑誌）へ

例　経済学 vs 法学

・　資料（データ）志向 vs 文献志向

資料（史料）あるいはデータ（情報）を研究の中心に据えるか、それともひたすら文献を読み、考えるか

例　歴史学 vs 哲学や学説史

Ⅲ　研究者に信頼される図書館

研究者から見た図書館の評価基準

・　蔵書の規模と質
・　本と雑誌の割合
・　開架と閉架
・　閲覧と貸出し
・　一般書架と特殊資料
・　中央図書館とサブジェクト・ライブラリー

Ⅳ　図書館とアーカイヴ

理想的には、刊本を所蔵利用する図書館、文書類を所蔵する文書館、非図書資料を収集する博物館と、いくつかの用途別の機能分化が必要になります。しかし、それぞれを独立に持つことは非現実的な状況ですので、さしあたり図書館の中に、可能なかぎり非図書資料を収集し、整理して、利用に供するようにしたらよいと思います。

利用者である教員や研究者にとって、退職後や引退後の資料保管は難事です。あるいは、在職時であっても、利用しなくなった図書資料や非図書資料の保管と利用は、なかなか厄介な問題です。図書館がそのための手助けをできないか。それにより、個人所有であった資料を広く社会所有として公開できるようになるのではないか。一つの個人的な提案です。

Ⅴ　社会科学における電子化のゆくえ

ｅジャーナル

近年、経済学を中心にｅジャーナルの存在感は確実に高まっており、他の社会科学分野でも、便利と思う人が増えています。しかし、自然科学とはどこか決定的に違うところがあります。その違いは、ｅジャーナルが最新の研究文献を読むための手段とは必ずしもみなされていないという点にあるのではないでしょうか。古い論文でもいまだによく使われる論文があり、新しい論文といっても、自然科学とは新しさのものさしが違うような気がします。
ここからは、社会科学における「新しさ」とはなにか、という興味深い問題が浮上します。

機関リポジトリ

社会科学の研究者にとって機関リポジトリのもつ意味。著書や学位論文の場合、雑誌論文の場合、とくに当該機関が発行する紀要類、あるいは、機関内で活動する研究会などの機関紙、さまざまな利点があります。著作権処理の問題が厄介です。

非図書資料のデジタル化公開

社会科学、とくにデータ重視の分野の研究者にとって、電子化の恩恵が一番感じられるのは、使いたいと思っている資料がデジタル化され、ウェッブ上に公開された場合でしょう。ただ、この場合も、個人情報保護あるいは著作権処理などの問題がネックになります。

全文検索データベース

大型コレクション等の全文検索データベースの登場により、貴重資料への時空を超えたアクセスが可能となりましたが、ただしそれを賄える財力のある機関と、そうでない機関とで、図書館格差が生じます。おなじく、電子ジャーナルの利用についても、格差問題が生じます。図書館格差が拡大する最大のきっかけは近年の場合、ここにあるようです。

Ⅵ　期待するもの

今後、電子媒体が利用できれば、それで十分だ、というような社会科学者が増えてくるかもしれません。しかし、彼らが絶対多数を占めることはおそらくないと思います。社会科学の多くの分野は、相変わらず冊子体の書籍を必要とするでしょうし、ネットからは得られない知のあり方を求めるはずです。それが明確に定式化したり、言語化できたりするのは、電子化という目新しさが薄れる、数十年あるいは 100 年後のことかもしれません。それまでは、図書館を守り、育て、利用して、土俵を割らないことです。社会科学系図書館の努力目標をさしあたり三つ挙げておきます。

(1) 図書館のストックを活かす

利用率のアップ

ストックのアップ（個人蔵書の社会化）

利用してもらうための手がかりとして電子化（書誌情報あるいは資料そのもののデジタル化）

(2) 図書館の専門性を高める

研究資料の所在や探求方法などを教えてもらえるところ

(3) 開かれた図書館を心がける

広く社会に開かれた図書館、その前提として、研究者のコミュニティーに向けて開かれた図書館を心がけることが必要でしょう。そのためには、全国の図書館の連携を通じて、専門化した各館を相互に結びつける活動が必要です。図書館の国際化も電子化の技術を背景にしつつ進めていかなくてはならないと思います。

図書館員にとって必要な歴史意識とはなにか

～グローバリゼーションを例に～

漠然とした疑問

現代はどんな時代か？　未曾有の時代か？　時代を襲う未曾有の体験とは？
グローバリゼーション？　グローバリゼーションとは現代に特有か？
グローバリゼーションとはなにか？

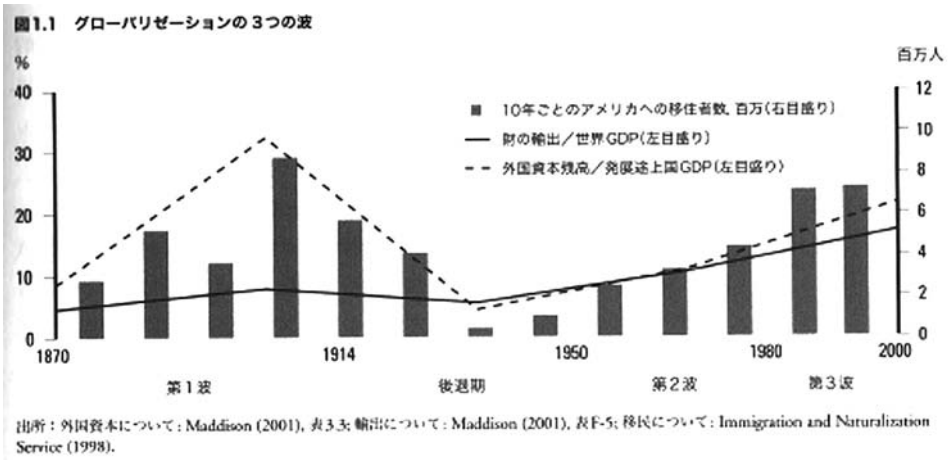
問題を提起してみよう

グローバリゼーションの常識的な理解：ヒト・モノ・カネ・情報の国境を越えた移動

だが、そんなものはいつでも存在した：歴史はいつでもグローバリゼーションの時代だったのだ

現代グローバリゼーションの三つの波

グローバリゼーションの第一波：1870～1914 年
グローバリゼーションの第二波：1945～1980 年
グローバリゼーションの第三波：1980 年～現在



The World Bank, *Globalization, Growth, and Poverty: Building and Inclusive World Economy,* 2002 世界銀行（新井敬夫訳）『グローバリゼーションと経済開発』シュプリンガークラーク東京、2004 年、27 頁

問題を振り返ってみよう

問題を歴史的文脈に位置づけるチャーマーズ・ジョンソンの洞察
　「グローバリゼーション」とは「１９世紀にはたんに帝国主義と呼んでいたものを、もっともらしく言い換えた言葉」にすぎない（チャーマーズ・ジョンソン〔鈴木主税訳〕『アメリカ帝国への報復』集英社、2000 年、254 頁）。

「テロリズムとは、難攻不落の敵の犯した罪に人びとの注意を引きつけるために無辜の人びとを攻撃することである。二十一世紀には、過去数十年間の帝国主義の無謀な行為が原因で、無辜の人びとが予期せぬ報復を受けることになるだろう。アメリカ人の大半は、アメリカ人の名において何が行われたか、何が行われつつあるかを、ほとんど知らないかもしれない。だが、アメリカが世界支配を追求しつづけているために、すべてのアメリカ人は――個人としても集団としても――法外な代償を支払うことになるだろう。」（同上書、55 頁）

これは、アメリカにおける９．１１同時多発テロ（2000 年 9 月 11 日）の 1 年前に出版された本の一節である。

問題を概念的に整理してみよう

近代帝国主義の歴史

スペイン・ポルトガル帝国（重商主義）……　資本主義以前の海洋帝国
イギリス帝国（産業主義）　……　自由貿易帝国主義
アメリカ帝国（金融主義）　……　現代の帝国主義

驚くべき類似

1873-1896 年の大不況→第一次世界大戦
1930 年代の大不況→第二次世界大戦
1970 年代の構造的不況→？

グローバリゼーションに潜む二つの傾向

世界市場を統一化する流れ（アメリカの支配）
世界市場をブロック化する流れ（ドル圏、ユーロ圏、人民元圏？）

問題を視覚化してみよう

映画『タイタニック』を通してみる当時のグローバリゼーション

第 1 場面　上流階級の移動
2　下層階級の移動
3　ニューマネー
4　階級構造
5　新旧の支配階級
6　社交の階級性
7　物資の移動
8　電信
9　その後の大恐慌

1912 年　タイタニック号沈没
1914～18 年　第一次世界大戦
1929 年 10 月 24 日　ニューヨーク株式大暴落
～1932 年　大恐慌がピークを迎える
1932 年　ナチスが第一党